

果、先の現観の構造と同じであるならば、最終的には行の主体である菩薩と、行の対象である法界という種姓が一体になる。次の瞬間以後、主体であった菩薩は仏となり、法界という種姓はもはや「種姓」と名づけ得ない。しかし「仏」と名づけられるべき主体と法界は以後にも一体であると考えられる。Hによって四種に分けられる法身の一つである自性身は、法界を本体とするもの(dharmadhātu-rūpa)であると説かれているからである(AAA p. 914 ll. 9-17)⁽⁸⁾。

行の最終段階において菩薩と一体になる法界すなわち種姓は、その時点において菩薩と同一関係にある。本来、所有関係にあった主体と対象が最後に同一関係のものに変化するところにAAおよびHの「現観」の特徴の一端が見出されるが、種姓という対象に関してもその例外でない。Hの「菩薩は種姓である」という同格表現による記述は、以上のような構造を持った行の最終段階を捉えたものであると理解できよう。

註

- (1) AA自身が「現観」と名づけるのは八段階のうちの第五「頂点に達した現観」(mūrdhābhisamaya)のみであるが、Hの「八現観」(aṣṭābhisamaya)等の例にならって全段階を「現観」として捉えることとする。

- (2) 真野龍海『現観莊嚴論の研究』山喜房仏書林、昭和47年、pp. 52-57 参照。
- (3) 高崎直道「種姓に安住する菩薩」『中村元博士 還暦記念論集 インド思想と仏教』春秋社、1973、pp. 207-222 参照。
- (4) 北川秀則「Svabhāva に対する一考察」『印度学仏教学研究』16.2, 1968、pp. 69-75 参照。
- (5) *LÑ* 158a6-b1; *NÑG* 106a4-5; 110a2-3 など。
- (6) 拙稿「ハリバドラ著『現観莊嚴論註』第IV章和訳・解説(1)」『SAMBHĀṢĀ』7, 1986、pp. 45-48 参照。
- (7) Hは八段階より成る現観のうち第四、七、八段階において“abhisambodha”の名称を用いる。しかしながらチベット訳では第四段階のその名称に対して“mñon par rdzogs par rtogs pa”の訳語が適用されているが、一方、第七、八段階のそれには“mñon par rdzogs par byañ chub pa”という訳が用いられている。このことは「一瞬になされる完全な覚知」が「法身」にたいそう接近したものであるとチベット人が理解していた可能性のあることを示している。したがって現観の主体が仏の形象自体になる瞬間が法身を得る一刹那前であっても、AAの伝統においては異とするに当たらないと思われる。
- (8) 同所には他の三身が「勝義において法性を本体とするもの(dharmatā-rūpa)」であると説かれている。

東北大学所蔵河口慧海コレクションを整理して

田 中 公 明

河口慧海は、日本が生んだ偉大なチベット学の先駆者として、世界的に有名である。慧海が二度に亘るチベット旅行と、その後の北京への旅行の途中で蒐集した膨大なコレクションは、彼の死後、遺族の手により東北大学へ寄贈された。現在その内で、文献関係のものは印度学仏教史研究室の、また美術工芸関係は東洋日本美術史研究室の管理下にある。

とくに美術関係のコレクションの一部は、チベット関係の展覧会や美術書で紹介され、注目されていた。その内訳は木彫仏8軀、塑像10軀、経板30枚、習字板6枚、画像69点、版画529枚、碑文(拓本を含む)36点、仏具・工芸品378点、金銅像26軀、石像28軀に及んでいる。

筆者も、これらに関心を寄せていたが、展覧会のカタログや美術書に掲載された尊名には、疑問に思われるも

のがあった。ところがこの度、東北大学文学部東洋日本美術史研究室により、河口コレクションの目録が作成されることとなり、筆者もこの作業に参加する榮譽を与えられた。

本稿ではこの中から、筆者が特に興味を覚えた数点につき、その調査結果を発表することにした。詳しくは、本年東北大学から刊行される「河口慧海請来チベット資料図録」を見られたい。

① (旧)画25→(新)河2-048

(旧尊名)蓮華手観世音菩薩像。

このタンカは、中央に赤色の観音を大きく描き、周囲にヒンドゥーの諸天を11尊描いている。中央の観音の尊容は、ネパール百八観音中の蓮華手観音の図像に類似す

るが、周囲にヒンドゥーの諸天を配するのは、同じくネパール百八観音中の諸天生成観音 (Sṛṣṭikānta Lokeśvara) の特徴である。『グナ・カーランダブューハ』によると、観音は世間出生 (lokodbhava) 三昧に入って、右眼から月天、左眼から日天、額から大自在天、肩から梵天、心臓からヴィシュヌ、上下の歯から弁才天、口から風天、腹からヴァルナ、心臓から吉祥天、右膝からクペーラ、足から地天を誕生させたという。

本像では、観音の肢体の各部位から瑞雲が立ちのぼり、その雲中に諸天が湧現するという表現が採られている。同様の図像は、真鍋俊照著「タンカ」P. 219 図版 R-7 (観音と蓮華) にも見られる。しかし上記の作品は損傷が激しく剥落が進んでおり、画風も中国・チベット化しているのに対し、本像はネパールの画風を忠実に留めており、保存も極めて良好な優品である。

② (旧)画 2→(新)河 2-049

(旧尊名) 智主月黒明王画像

本像はインド風のトーラナ (Torana) 中に、四面八臂、赤色の観音を描き、左右には白色のガネーシャと青色のマハーカーラを描いている。観音は左脇に妃を伴う。上部には金剛界五仏を描き、下部にはナーガリー文字の銘があるが、サンスクリット語ではない。

絵画ではないが、Ulrich von Schroeder の *Indo-Tibetan Bronzes* 392¹⁾ には、本像と全く同じ像容のブロンズ像が Sukhāvati Lokeśvara (極楽浄土観音) として紹介されている。上掲書によればこのブロンズ像は AD 1817 年の在銘作品である。

またネパール百八観音図像²⁾ には、若干異なった極楽浄土観音の図像が収められているが、この資料でも極楽浄土観音の身色は赤色で、左脇に妃を伴うとされている。したがって本像もネパールにおいて、極楽浄土観音として描かれたものと推定される。

③ (旧)金銅仏 108→(新)河 1-022

(旧尊名) 般若仏母像

本像は、8 臂の般若仏母と伝えられていたが、8 臂の不空罽索観音 (Amoghapaśa) の像であることが判明した。インド・チベットの不空罽索観音の図像については、種智院大学の頼富本宏教授の論考がある³⁾ が本像は 1 面 8 臂像の系統に属する。筆者もチベット旅行のおり、不空罽索観音の図像を目にしたが、チベットの作例は私見の及ぶ限りでは皆、3 面 4 臂像であった。

これに対して 1 面 8 臂像はネパールに多く、百八観音図像集の他、ネパール伝来の “Amoghapaśapūjavidhi”

にも 1 面 8 臂像が説かれているという。本像も慧海がチベット旅行の際基地とした、ネパール製の仏像である可能性が高い。なお “Amoghapaśapūjavidhi” については、Pratāpāditya Pāl 氏の論考があると言うが、残念ながら未見である。

④ (旧)金銅仏 114→(新)河 1-024

本作品は右手に宝珠を持ち、左手を上げ何物かを持つ姿勢の菩薩像である。チベットの図像集等には対応するものがなく、従来その尊名が疑問とされていたものの一つであった。

左手の持物を無憂樹とし、摩耶夫人の像とする意見があったが、釈迦誕生図の摩耶夫人は、右手を上げて無憂樹を執る姿であり、その所伝はインドで確立している。

これに対しネパールでは、百八観音の一つに如意宝珠観音 (Cintāmaṇi Lokeśvara) があり、右手に宝珠、左手に如意樹 (kalpataru) の枝を執る尊容である。また「仏教芸術」152 号には、ネパールのケシャチャンドラ寺院旧蔵の、美しい如意宝珠観音のタンカが紹介された⁴⁾。本像もまた、慧海が入蔵の際、根拠地としたネパールにおいて入手されたものであろう。

⑤ (旧) 40-C-4b→(新)河 2-129-I, II

(旧尊名) 完全総族毘盧遮那仏曼荼羅

河ロコレクションでは、悪趣清浄普明曼荼羅や『秘密集會』阿閼金剛 32 尊曼荼羅など、異なった種類の曼荼羅が皆、完全総族毘盧遮那仏曼荼羅と称されており、筆者はかねてから、この名称を疑問としていた。

ところが今回の調査で、(新)河 2-129-II の悪趣清浄普明曼荼羅にチベット文字による “Kun rig rnam par snañ mdsad kyi dkyil ḥkhor” (普明毘盧遮那曼荼羅) の書き込みを、また (旧)版 40-C-4b→(新)河 2-127-II の『秘密集會』阿閼金剛 32 尊曼荼羅に、慧海自身と思われる筆跡の「完全総族毘盧遮那仏曼荼羅」の書き込みを発見した。

つまり慧海は “Kun rig” (普明) を、“Kun rigs” (総族) と誤認して、「完全総族毘盧遮那仏曼荼羅」なる名称を定め、さらにこれを、誤って『秘密集會』阿閼金剛 32 尊曼荼羅の方に記入したと推定される。

⑥ (旧)版 40-C-19→(新)河 2-112-I, II

(旧尊名) 西藏新派開祖宗喀巴及其法伝燈前後喇嘛

この木版画は、中央に大きく仏塔を背にした十一面観音を描き、上部の左右には白色ターラ菩薩と、無量寿仏 (Amitāyus)⁵⁾、中心部の左右には阿閼、宝生、毘盧遮那、不空成就の四仏、下部には護法尊を描く。

十一面観音の後に描かれる仏塔には、ランチャ文字で『仏頂尊勝陀羅尼』が記されている。チベットでは、『仏頂尊勝陀羅尼』やそれを仏格化した仏頂尊勝母 (Uṣṇiṣav ijayā) の描かれる仏塔を、ナムギェル・チューテン (rNam rgyal mchod rten) と称している。これは釈尊が入滅前に、ヴァイシャーリーで寿命を加持した霊跡を記念したものと伝えられ、八大霊跡塔⁶⁾の一つとされている。

チベットでは『仏頂尊勝陀羅尼』の信仰が盛んで、それを仏格化した仏頂尊勝母も、「死魔に打ち克つナムギェルマ」として有名である。またこれに延命・息災の白色ターラー菩薩と、長寿の象徴である無量寿仏を加えた、長寿三尊 (Tshe lha rnam gsum) もしばしば描かれる。

長寿三尊のセットでは、無量寿仏や白色ターラー菩薩を中尊としたものが一般的だが、本作品では、仏塔の形の仏頂尊勝を中心に置き、他の二尊を左右に配する形式が採られている。異例と言えよう。

また中央に十一面観音を描き、周囲に阿闍、宝生、毘盧遮那、不空成就の四仏を配する構成は、十一面、あるいは十一面千手を本尊とする、大悲観音曼荼羅に見られる⁷⁾。

本作品は、長寿三尊と大悲観音曼荼羅という、二種の異なったモチーフを一つの画面に収めており、特色あるものと言える。

⑦ (旧)版 40-C-27→(新)河 2-098-I, II

チベットには正式の曼荼羅のタンカの他、曼荼羅を構成する諸尊を、タンカや壁画の画面に展開して描いた作品がある。ヘーヴァジュラ (Hevajra) 9尊曼荼羅⁸⁾、サンヴァラ (Samvara) 62尊曼荼羅⁹⁾、金剛界53尊曼荼羅¹⁰⁾、パンチャダーカ (Pañcaḍāka) 5尊¹¹⁾などの作例が、従来知られていたが、本作品は薬師51尊曼荼羅の諸尊を、鳥瞰図的に展開して示したものである。

チベットの薬師曼荼羅については、既に別稿で論じた¹²⁾ので詳説しないが、七仏薬師、釈迦、般若仏母、16菩薩、十方天、十二神将、四天王の51尊から構成されている。また、本コレクション(旧)版 40-C-7a→(新)版・河 2-131-I, II は、中心に三昧耶形を描く様式の薬師曼荼羅の遺品である。

これに対して(新)河 2-098-I, II では、中心に薬師如来を大きく描き、最上段には薬師曼荼羅の第2重を構成する釈迦如来と七仏薬師中の他の六仏、第二段には薬師曼荼羅の第3重を構成する16菩薩、下段には、薬師曼荼羅の第4重を構成する十方天、十二神将、四天王を配置している。また全体の様式はインド風というより、むしろ中国絵画の影響が強い。

チベットでは、図様を一定に保つため、タンカの下絵に木版画が使用されることがあると言う。代表的なものとしては、タシルンボ寺 (bkra śis lhuñ po) が版木を所蔵するパンチェン・ラマのセットがある¹³⁾。チベット文化圏のどの寺院を訪れても、パンチェン・ラマのタンカが、驚くほどよく似ているのは、このためである。

チベット仏教では、曼荼羅の諸尊を展開して示す絵画様式が普及し、薬師信仰も浸透していたことから考え、本作品も薬師如来のタンカの下絵として、開版されたものと推定できる。

⑧ (旧)版 40-C-38~39→(新)河 2-056~057

(旧尊名)総得曼荼羅

チベット仏教古派のニンマ派には、シト (Shi khro) と称せられる一連の尊格群がある。シトについては、既に別稿で論じたが、その起源は古く敦煌文献にまでさかのぼりうる¹⁴⁾。本コレクション中にも、寂靜40尊=(旧)画38-IV-2→(新)河 2-008 (旧尊名)報身金剛仏陀の像と忿怒60尊=(旧)画38-IV-4→(新)河 2-009 (旧尊名)忿怒明王明妃曼荼羅のタンカが含まれている。

なおシトの尊数については、寂靜尊の尊数を42、忿怒尊の尊数を58とする者が多い¹⁵⁾。これは本来の寂靜40尊に、本初仏法身普賢父母仏を加えて42とし、残りの58尊を忿怒尊とするものである。しかしニンマ派の教学では、法身普賢は寂靜・忿怒百尊の総体を象徴するものとされるから、この説は理に合わない。

また忿怒尊の内訳は、6部ヘールカ、ガウリー等の8尊、8人の動物の頭を持つダーキニー、4人の門衛のダーキニー、28尊のワンチュクマ (dbañ phyug ma) であるから、父母仏を1尊と数えれば54尊、父母仏を2尊と数えれば60尊となり、いずれにしても58尊とは数えられない。

さらに前述の敦煌出土チベット語シト文献や、近代ニンマ派の学僧が著したシト文献を調査しても、シト本来の尊数は42尊と、58尊にはならない。したがって本稿では、異例ながらシトの尊数を寂靜40尊と忿怒60尊としている。

さらに本コレクション中の(旧)40-C-38と39は、紙の上に円を描き、その中に寂靜・忿怒百尊の尊名を、チベット文字で記入している。おそらく寂靜・忿怒百尊のタンカを製作する際、配置見取図として使用されたものであろう。上述の彩色タンカとの関連が注目されるが、残念ながら細部の配置が一致しない。

また忿怒尊の中に、通常は含まれないベマ・ガルワン (Pad ma gar dbaṅ=Padmanarteśvara)¹⁶⁾を一際大きく

描くよう指定しているのが注目される。このようにシトでは、阿闍梨の意楽により、若干の尊格が任意に付け加えられることがある。シトの尊数についての学説の混乱もこのような事情に因るのであろう。いずれにしても興味深い資料である。

⑨ (旧)版42XXXX-21→(新)河 2-132-I, II

(旧尊名)万年擁護吉慶輪符

本コレクションには、タンカや彫像、木版画などの他、護符として使用された版画類が多量に含まれている。文殊・観音・金剛手の謂ゆるリグスムゴンポ (Rigsum mgon po) や不動尊の真言 (慈救呪) を書いたものも有る。チベットでは一般に、不動尊 (Mi gYo mgon po) の地位が低いと言われていたが¹⁷⁾、民間信仰の次元では、根強い不動信仰が存在したのであろうか。

また仏教の真言と誤って、ピシミッラ (アラーの御名において) という、イスラムの祈りの文句を書いたものも見られた。イスラム教徒であるカチュから伝承されたものであろうか。チベット人の民間信仰を知る上の、貴重な資料であろう。

本稿でとりあげる (新)河 2-132-I, II, 中央に剣を描く形の護符で、下部には銘が彫り込まれている。銘文には、サキャ派の高僧サキャ・パンディタが火災避けのため考案したとあり、サムイエー (bSam yas) で開版されているという。

チベットでは、この図案は聖僧図 (sdom brtson dam pa) と呼ばれ有名である。この図案については、チョゲイ・ティチェン、トゥブテン・レクシェー・ギャムツォ (Thub bstan legs bśad rgya mtsho) の *Gate way to the Temple*¹⁸⁾、B. C. Olschak 女史の *Mystic Art of Ancient Tibet*¹⁹⁾、Jackson 夫妻の *Tibetan Thangka Painting*²⁰⁾、中国・民族出版社の『蔵漢大辞典』²¹⁾ などに説明が見られるが、諸氏の解釈には相異が見られ一致しない。そこでこの図案の解釈については、後日別稿を期すことにしたい。

筆者は1985年8月にサムイエー寺を訪れた。寺院は文化大革命の際破壊され、中央の大殿のみが残存していた。壁画も剝落していたが、その中で大殿正門入口の紋章のみが、色鮮やかに修復されていたのが目についた。寺紋であろうと思い写真撮影したが、これがそのサムイエーの防火護符であることが判明した。文革以後一早く復興されたことから見ても、寺にとってはよほど重要な護符なのであろう。

なお学会発表のおり、本護符について、イギリスのジャクソン氏から、教示を受けた。記して感謝したい。

以上、膨大な河コレクションの中から、筆者が興味を覚えた9点につき、調査の概要を記してみた。河コレクションは、慧海没後に、遺族の手で寄贈されたため、一々の内容や来歴が不明の物が多い。今後は本稿で試みたような図像学的研究の他に、慧海の遺した膨大なチベット旅行記などを参照する、総合的調査の必要性があるように思う。

今回の調査については、東京大学文学部附属文化交流研究施設の青柳正規助教授、東北大学文学部東洋日本美術史研究室の上原昭一教授、小川裕充助教授、内山淳一助手他、東北大学文学部印度学仏教史研究室の磯田熙文助教授、奥山直司助手他のお世話になった。また、ネパール関係のものについては、仏教資料文庫の高岡秀暢氏と²²⁾、日本放送出版協会の田口汎氏²³⁾の研究を参照させていただいた。記して感謝の意を表したい。

註

1) Ulrich von Schroeder.

Indo-Tibetan Bronzes Hong Kong, 1981.

2) 『ネパール百八観音紹介』(百八観音木刻図像集刊行会, 1982) この他、B. バッタチャルヤも、その著作中で、百八観音図像集を紹介しているが、誤りが多い。

3) 頼富本宏「不空羂索観音の図像学的一考察」印仏研 33-1.

4) 「仏教芸術」152号 (毎日, 194年), 「特集・ネパールの歴史と仏教美術」口絵 1

5) チベットでは、如来形の阿弥陀仏をウーパメー (Hod dpag med) と称し、菩薩形の阿弥陀はツェパメー (Tshe dpag med) と称される。後者については、『チベットの秘宝』(ぎょうせい)の図版解説 P. 28 で論じたが、阿弥陀関係の陀羅尼經典である『無量寿宗要經』(Aparimitāyusjñāna-dhāraṇī) 関係の儀軌に説かれるものである。

6) チベットでは八大霊塔の信仰が盛んで、それぞれの仏塔は、独特のデザインで描かれる。

7) 『西藏曼荼羅集成』(講談社, 1983年)

図版135 ラクシュミー流大悲観自在曼荼羅

8) *Mystic Art of Ancient Tibet*, London, 1973. P. 33.

9) *ibid.* P. 51.

拙稿『チベットの秘宝』図版解説 P. 25「サンヴァラ父母仏」

10) 拙稿「グゲ遺跡の金剛界曼荼羅壁画について」印仏研 33-2.

- 11) 同上
- 12) 拙稿「慈寧宮宝相楼のブロンズ像立体曼荼羅セットの解析」東京大学文学部文化交流研究施設紀要第7号
- 13) タシルンポ版のパンチェンラマのセットについては、トゥッチの *Tibetan painted Scrolls* の図版解説 P. 410~417 に詳しい。
- 14) 拙稿「敦煌出土ニンマ派密教典籍について」『チベットの仏教と社会』(春秋社, 1986年) 所収
- 15) 中沢新一「42柔和尊と58忿怒尊」『大チベット展』(毎日コミュニケーションズ, 1983年) 所収他
- 16) Padmanartesvara は母タントラ系の蓮華舞自在族の主尊。その尊容は B. バッタチャルヤの *The Indian Buddhist Iconography* P. 133~136 に詳しい。蓮華舞自在族については、拙稿「一切仏集会拏吉尼戒網瑜伽タントラとその曼荼羅について」密教図像 3, において論じている。
- 17) 『チベット密教の研究』—西チベット・ラダックのラマ教文化について—(種智院大学密教学会 1982年) P. 44
- 18) Thub bstan legs bśad rgya mtsho *Gateway to the Temple* 1979 Kathumandu.
- 19) B. C. Olschak *Mystic Art of Ancient Tibet* 1973 London, P. 200.
- 20) David P. & Janice A. Jackson *Tibetan Thangka Painting* 1984 London, P. 42.
- 21) 『蔵漢大辞典』1984, 北京 P. 1481b~1482a.
- 22) 『ネパール百八観音紹介』解説篇, アモーガヴァジュラ・ヴァジュラーチャールヤ著・高岡秀暢訳
- 23) 田口 汎「ネパールの宗教美術管見」『ネパール研究の現状と方法』仏教芸術 152 号。

受 贈 図 書 目 録：〔著者五十音順〕

(昭和58年4月~昭和59年3月受贈分)

- | | |
|--|--|
| <p>阿 理生
1982. 3 瑜伽行派 (Yogācārah) の問題点——唯識思想成立以前の思想的立場をめぐって——『哲学年報』41。
1984. 2 瑜伽行派の空性と実践〔附録〕Mahāyāna-sūtrālaṅkāra 梵文写本対照表『哲学年報』43。</p> <p>海野 孝憲
1982. The Vijñaptimātratāsiddhi of Ratnākaraśānti (共著)『名城大学人文紀要』28。
1983. 3 ラトナーカラとシュバグプタ『印度学仏教学研究』31-2。</p> <p>岡崎 精郎
1983. 8 石濱・石田両博士学術交流記録抄『古代文化』35-8。</p> <p>岡本 嘉之
1982. 書評「チベット研究文献目録日本文・中国文篇 1877年~1977年」貞兼綾子編。亜細亜大学, アジア研究所刊。昭和57年4月。『東洋学研究』17。</p> <p>木村 隆徳
1977. 12 Une Lacune dans le Manuscrit tibétain de Touen-houang, Pelliot tibétain 116『印度学仏教学研究』26-1。
1981. 3 敦煌チベット語禪文献目録初稿『東京大学文学部文化交流研究紀要』4。
1982. Cig car hjug pa について『田村芳朗博士還暦記念論集 仏教教理の研究』所収
1982. 11 古代チベットにおける禅思想の流れ『東洋</p> | <p>学術研究』21-2。
国士舘大学教養学会
1983. 9 『国士舘大学教養論集』17。
1984. 4 『国士舘大学教養論集』18。
国立政治大学辺政研究所
1983. 10 『国立政治大学辺政研究所年報』14。
曹洞宗宗務庁
1983. 8 『曹洞宗研究員研究生研究紀要』15。
田中 公明
1983. 2 チベットの曼荼羅について(1)~(4)『チベット文化研究会報』7-1~4。
1983. 10 曼荼羅の歴史と発展について『仏教文化』13-16。
1984. 1 『曼荼羅の歴史と発展について』</p> <p>谷 貞志
1972. 3 「瞬間的存在性」論証 Kṣaṇikatvānumāna とその「論理空間」の問題〔一〕『印度学仏教学研究』20-2, 1972;〔二, 前半〕『フィロソフィア』60, 1972. 6;〔二, 後半〕『フィロソフィア』61, 1973. 2;〔三〕『印度学仏教学研究』21-2, 1973. 3;〔四〕『印度学仏教学研究』22-1, 1974. 3。
1981. 8 Pramāṇavārttika, IV. [Parārthānumāna] の問題〔1〕,『高知工業高等専門学校学術紀要』17。
1982. 3 「Pramāṇavārttika, IV」解釈の問題『印度学仏教学研究』30-2。
1982. 9 Pramāṇaviniścaya, III 解釈の問題〔1〕『高知工業高等専門学校学術紀要』18。</p> |
|--|--|